

2016 年度 福島・シンポジウム

村本邦子（立命館大学）

9 月、チェルノブイリに行ってきた。去年、三春にあるコミュタン福島を訪れた後、福島大学の後藤忍先生によるチェルノブイリ博物館との比較レクチャーを受け、時間経過と市民運動のなかで展示が変化してきたことを知った。現地に行ってみてみたい、感じてみたいという気持ちが高まり、いろいろと事前準備をして実現したものだ。

見聞したもの、感じたことはたくさんありすぎて、とても書ききれない。簡単にまとめてしまえば、気が遠くなるほど長い放射能時間（人間にとっての 30 年は放射能にとっては瞬きを 1 回する程度のものだ）、ダークツーリズムの神髄と、ウクライナでの民主化運動のうねり。

帰国後すぐ、アメリカで 5 月に放映され話題になった TV ドラマ「チェルノブイリ」5 回シリーズが日本でも放映され、この時だけスターチャンネルに登録して観た。行く前に読んだノーベル賞受賞作家スベトラナ・アレクシェービッチ（2001）『チェルノブイリの祈り』（岩波現代文庫）やバンドデシネ作家エマニュエル・ルパージュ（2014）『チェルノブイリの春』（明石書店）も読み返した。TV 番組「世界ふれあい街歩き」がたまたまキエフをやっていて、チェルノブイリ博物館、避難経験を持つ市民の声、クリミア紛争の犠牲者と帰還兵なども取り上げられていた（ほっこり系のこの番組としては珍しい？）。

現地に行ってみることで、世界の見え方がまったく違うことを痛感する（単に想像力の乏しさなのかもしれないけど）。何とかこれを伝えたいと、対人援助学会でワークショップ「9 年目の福島、34 年目のチェルノブイリ」をやってみた。とても伝えきれるものではないが、それでも努力し続けるしかない。



2016年12月 福島

12月2日(金) 福島入り、ビーンズふくしま、みんなの家

快晴で富士山がきれいに見える。12時半に福島駅着、宿に荷物を置いて、皆と合流し、NPO 法人ビーンズふくしまを訪問する。事業拡大に伴い、スタッフも増え、臨床心理士は、常勤2人とパート3人いるそうだ。面接室は4部屋あり、2部屋に箱庭もある。



それから、「みんなの家」へ。隣には学童保育ができています。軒先には、グリーンシートに包まれた除染土が置かれていた。住居の除染はほぼ終わっているが、除染土は行き場がないので、こうして置いておくか、穴を掘って埋めるなど、いずれにしても、各家に保管することになるそうだ。何とも言えず、重苦しい気持ちになる。



でも、「みんなの家」に一歩足を踏み入れると、クリスマスの飾りつけで、楽し気なわくわく感に包まれる。ハロウィーンには、子どもたちが近所のお宅を練り歩き、おやつをもらって回ったそう。この地域は平均年齢が80歳。町会長さんも良い方で、子どもたちの存在をととても喜んでくれるという。子育て中の家族にとって、とても良い環境である。

「ママカフェmini」は、子育てセンターでやっている「ママカフェ」から一歩進んで、地域の人と溶け込みたいという気持ちが出てきた人たちを対象にしている。「パパカフェ」もあり、最近子育て始めた父もやってくる。皆、いろいろな思いを抱えている。福島に避難してきた人

たちは、補償金のことですいろいろ思われるのが嫌で、知られたくない。

最近では学校の給食やプールも通常化しているが、放射能を気にする親は牛乳を飲ませない。弁当は目立ちすぎるが、牛乳はアレルギーもあるから、そんな選択もできる。避難先から戻ってきた人、福島市に避難してきた人、ずっと地元で暮らす人、放射能汚染が気になりながらも口に出せない人のさまざまな思い。

時間経過とともに、それぞれに複雑な事情が生まれ、互いに話すことが難しくなっている。だから、同じ立場の人が集まる場や、みんなの中で話せないことを話す個別相談も設けている。





夜は、昨年に引き続き、2ヶ所の仮設住宅での学習支援に参加させてもらった。少し気になる子どももあるが、去年もいた子どもたちは少しずつ大きくなり、落ち着いて勉強していた。それぞれに家庭の事情を抱えているかもしれないが、スタッフと学生ボランティアに見守られて、少しずつ成長していく子どもたちの姿が愛おしかった。

終了後は、山女で円盤餃子を食べる。



12月3日(土)

こむこむは、今年も開館を待つ親子や中高生で行列だった。午前中は、2階の交流コーナーにて、おもちゃコンサルタント小磯厚子さんによる遊びの講習。小磯さんは白河で子育て支援をし、東京おもちゃ美術館でおもちゃコンサルタントの資格を取られたとのこと、奇しくも設置した「遊びコーナー」は東京おもちゃ美術館の寄付によるもので、ご縁に驚くとともに、おもちゃと遊びについてのお話と実践を楽しませて頂いた。

午後は、小林秀子さんによる「絵本とみんなの編んでるシアター」。「編んでるおばさん」こと小林秀子さんは、埼玉から福島に移住して、絵本の登場人物を編みぐるみにした人形劇をやっている。どことなくひょうきんな編みぐるみにほっこりしながら、子どもたちと一緒に絵本の世界を楽しんだ。福島が大好きで、福島の子どもたちのために活動をされておられるという方々との出会いに励まされる。

11時半から4時半まで、東京おもちゃ美術館寄贈のおもちゃセットを使った遊びコーナーも開設した。途中、学童保育の子どもたちや先生たちも加わり、始終にぎやかだった。隣のフリースペースで勉強している中高生が気になっていたが、子どもたちがカプラで高いタワーを作っているのを笑顔で見守り、写真を撮ったりしていた。とてもよい雰囲気、ほっとした。都会の子どもたちと比べ、なんだか余裕や器の大きさを感じる。



12月4日(日)

4日午前中は、4階企画展示室にて、毎年恒例の「クリスマスカレンダーをつくろう」を実施した。当初予定していた30名を超える70名が参加、保護者を入れると140名以上の参加者が見込まれるということで、うまく運営できるか多少なりとも緊張した。遅れてくる人たちもあり、会場奥からランダムに着席したことから、入口のグループとの進捗状況が異なり、正直、なかなか大変だった。

テーブルに配置されたスタッフたちが奮闘してくれ、何とか無事終了。みなさんに喜んでもらえて良かったが、参加してくださった家族とゆっくりと言葉を交わす余裕が乏しく、来年からは、残念でも人数制限しようと話し合った。

午後は団士郎の家族漫画トーク。毎年楽しみにしているという継続参加者もあり、和やかに楽しいひと時を過ごした。



2017年2月26日(日)シンポジウム「東日本大震災から7年目を迎える今」

2016年度、1年をまとめるシンポジウム。今回は、ゲストにフリージャーナリスト藍原寛子さんを招き、「自主避難者は今」というテーマで話してもらった。藍原さんは、福島市で生まれて育ち、市内で最も放射線量が高くなった東側の地域に住んでいるとのこと。下記、藍原さんのお話の一部を紹介する。

原発事故から7年目を迎え、今年は大きな変化がある。3月31日、4月1日を節目に、帰還困難地域を除き、避難区域が解除される。今日のタイトルである「自主避難者」の定義は曖昧なまま始まったが、ますます曖昧になっていくだろう。

国が指定した避難区域からの避難者を強制避難者と言い、それ以外の地域からの避難者を、通称、自主避難者と言う。自主避難者という言葉の中には2つの意味があって、行政が決めてくれなかったから自分たちで判断して避難するしかなかったという意味と同時に、自分たちが積極的に避難を選び取った、自分たちで決めたという意味である。

福島をひとくくりに議論することの意味があるのか。原発事故の被害は県境を越えているのに、福島の問題に矮小化されてしまう。今後、避難区域の解除によって、今度は避難区域に指定されている

帰還困難区域の人たちだけが被害者だと、どんどん現状が見えなくなってくるだろう。よく、「福島はひとつ」とマスコミなどで言われるが、実際には、福島県は浜通り、中通り、会津という全く文化の異なる3つの地域に分かれており、もともと多様な土地だった。歴史的にも抵抗運動が盛んだった土地であり、多様な価値が拮抗するなかで抵抗してきた。

原発災害、放射能の汚染に対して抗う人たちがどういう視点を持っているのか、何を考え、何を語っているのかということにフォーカスした分析が必要である。福島の人々の多様な声を一部紹介する。

・聞きたい曲があるの。でも、リクエストできない。泣いちゃう。亡くなった息子がいて、その子が好きだったの。巨人の星のテーマ。その子の思い出も何もないの。写真も新品のスーツも。探そうにも20キロ圏内だから、もう戻れない。
(2011年 浜通り70代女)

・国や県よりも「計測器」が信頼できるよね。/ 新聞やテレビが報じていない事実を、私たちに知らせて。今、福島県はどれだけ危険なのか、真実を教えて。
/ 避難した方がいいのかどうか、迷っている。こんなに情報がないなんて、福島は、見捨てられている気がする。
(2011年 中通り子育て中の母)

・県外からは福島は平常に見えるが、県民は戦争状態に置かれている。戦争状態なのに、普通の生活を送らないといけないという大きなギャップがある。そのギ

ヤップを埋め、「見えない敵と戦うツール」となるのが放射線測定器。早く県民に測定器が行き渡ってほしい、そんな思いから、プロジェクトが始まった。

(2011年 地元中小企業とガイガーカウンターの開発をした男性)

・専門家を招いた勉強会、保護者会を開催。ある母親が専門家に「先生にお子さんがいたら、今のこの状態で避難させますか、させませんか」と問うと、「…避難させます」との答え。

校長「結論として、やってもやらなくても、これで良かったと思うしかない、というところはある。当初私は、避難に否定的な方だったが、こうしてみると、一番深刻な時期に郡山を出られて、福島状況に関係なく落ち着いて学べたのは良かったのではないかと思う」(2011年 福島県内で唯一学校全体で避難した郡山市の朝鮮学校)

・人を裏切るような大人にならない。震災があって、政府の言っていることがあやふやだったりして、その時は「大人って信じられない」と思いました。でも、自分がそうならないよう、信頼されるような大人になれるよう行動していくことで、周りもそういう人になっていくだろうと思います。(2013年 飯舘村の新成人女性)

・もともと会津には豊かな水源があり、自立できる環境が整っていた。震災前は、食料自給率がカロリーベースで1000%、エネルギーは数百万キロワッ

ト。それが、地元でつくった電気は都会に持って行かれ、自分たちは都会から買った電気を使うなんて、そんなバカなことをやってきた。福島は、都会の植民地のような状態だった。原発事故を受けて、そんな状態から自立していかなくてはいけないと強く思いました。人間が放射能を完全にコントロールすることなんてできない。地元にあり、ポテンシャルの高い再生可能エネルギー、自然エネルギーを使って、自立すべきだと思った。子や孫たちにも誇れるような事業をしていきたい。(2014年 再生可能エネルギー事業所会津電力を立ち上げた佐藤彌右衛門さん)

・障害があるから、災害が起きたら、どこに泊まるかで命が左右される。世界旅行の体験があったから、「死ぬのは畳の上じゃなくてもいいよね。地球上で死ぬるんだから」というのがあって、なんでもかんでも福島で一生過ごすということでもなくても良いかなということもあった。でも今回、原発が爆発して、避難して、「あなたのふるさととは福島なんだ」って、へその緒をつかまれた気がしたんだよね。(2015年 田村市から京都に避難した障害のある女性)

昨年4月に高村薫さんと対談した。戦前がそうだったように、国民の物語が恣意的に作られた時、多くの人がそれに乗せられ、少数の声が抹殺されていった。たとえば、土とともに生きてきたのに、その土が汚染されていく時、人々はこういうふう生きていくのか。ひとりひと

りの言葉を集合の記憶にしていけるような物語、それを発信し、政策につなげていくメディアの役割が重要ではないかとおっしゃっていた。

アウシュビッツのホロコーストの中で、アップスタンダーズ（立ち上がる人）と言って、日記を書いたり、目でサインをしたり、仲間同士でブローチやアクセサリをボタンタッチしていくなどの活動があったという。連帯して声を上げる、「棄民」としての自覚から「起民」、立ち上がる人へと行動する人々。核や放射能の問題は普遍性を持ちながら多様、ハイブリッドであることによって生き延びようという、そういうサインとして捉えたい。

今、福島県内で抵抗のアーカイブが生まれている。従属していくアーカイブも沢山生まれているが、抵抗のアーカイブも人々の手によって生まれている。

ひとつは白河市にあるアウシュビッツ平和博物館と隣接する原発災害情報センター。民間もやり、行政もやり、赤坂憲雄さんのようなイニシアティブを持った人がやりと、混在することが良いのではないか。浪江町には国営の追悼施設、県や国によるアーカイブ施設、行政のアーカイブ施設がある。三春町には、最近コミュタン福島という放射能安全を中心にPRするような施設もできたが、街の歴史資料館には自由民権運動の資料もある。

抵抗の仕方としては、再生エネルギーをやるというようなこともあれば、測定所として被爆を防ぐというような活動もある。若松丈太郎さんのように、詩によって抵抗を示している人もある。自主避

難者というの、ひとつの抵抗の形ではないか。

国は、風評被害について、「報道などにより広く知らされた事実によって、商品またはサービスに関する放射性物質による汚染の危険性を懸念した消費者または取引先の懸念による当該商品またはサービスが取引停止等をされたために生じた損害」とし、これはマスコミのせいだと言っている。政府や行政は、国民を放射能の危険から防護しなかったという自らの失策には触れない。マスメディアに対する言論統制や自粛が起き、本来ならば住民の側に立つべきメディアが国にがんじがらめにされてしまった。

福島県には、「チャレンジ福島、消費者風評対策事業」というのがあって、「食と放射能に対して、県内外の消費者が不正確な情報や思い込みに惑わされることなく、自らの判断で商品を選択できるよう」と言っている。日本学術会議は、政府や自治体に対して農作物の販売低迷対策として、農作物の安全と安心の水準を高めることと言っているが、自分たちが情報を提供する側として、何をやっているかということについては述べていない。

「はてなキーワード」というインターネットのサイトでは、風評被害とは、「災害、事故、虚偽の報道や根拠のない噂話などによって、本来は直接関係の無い他の人達までが損害を受けること」というのは建前で、この言葉が使われるとき、実際は根拠のある被害を誤摩化し、被害者への同情を、無知な人たちから集めている場合が多い。因果関係を考えるのに疲れた人たちが使う便利な言葉」と書かれ

ている。

そんなふうに、国を挙げて、県を上げて、「風評だ、風評を撒き散らす加害者だ」と言われかねない環境があり、人々の本当の声がなかなか外に伝わらないということがある。

だから、さまざまな活動の中で丁寧に人々の声を聞き、その意味について議論を重ね、理解を深めていくということも必要ではないかと思う。これから災害救助法が打ち切りになるということで、支援の打ち切りによって「避難者」はいなくなる。では、自主避難者はどこに行くのか、どこにいるのかという新たに重い課題が出てくる。こんなふうに、人や資源のマッピングをしながら、人々と人々をつないでいく、そういった活動がますます重要になるのではないかと思う。

藍原さんのお話の後、例年のように院生たちの活動報告があり、フロアも交え、活発に議論が繰り広げられた。棄民から起民（アップスタンダーズ）へ。何と心強い視点だろう。藍原さんは、井上ひさしの「記憶せよ、抗議せよ、そして生きのびよ」という言葉で講演を閉じたが、私達もアップスタンダーズとして連なりたいと思った。



▲藍原さんのスライドから

つづく